

選択的友人関係志向が孤独感、ソーシャル・サポート、自己決定意識に及ぼす影響の検討

松尾由美（お茶の水女子大学） 安藤玲子（お茶の水女子大学） 坂元章（お茶の水女子大学）

キーワード：選択的友人関係・自己決定意識・ソーシャル・サポート

問題

昨今の若者は友人との深い付き合いを避け、表面的で希薄な友人関係しか築けない傾向にあるという論調が多く見られる。このような論調に対し、若者の友人関係は浅いのではなく、趣味や興味に基づき、状況や目的に応じて遊ぶ相手を選ぶような選択的な関係を望む傾向にあり、またこのような関係はどの世代にもあてはまることが指摘されている(松田, 2000)。このような関係を志向する者は、状況に応じて自ら選んだ相手と深い関係を築いているので、虚無感や孤独感とは逆にむしろ充実感を感じているのだという主張がなされている(辻, 1999)。その一方で、選択的友人関係のみを経験し、どんな状況でも同じ人と付き合い、互いを知り尽くした全面的な友人関係の経験が少ないことで生じる問題点も指摘されている。小林(2001)は選択的な友人関係ばかりを経験すると、状況や目的ごとに他者と接するので1人の人間の様々な面を理解する経験に欠けるため、自分を相対的に評価できず、またその状況以外で相手が何を考えているのかわからないので不安が強いと主張している。深い関係を経験しても、全面的ではなく部分的な関係では、悪影響を及ぼす可能性が懸念されている。

このように、選択的友人関係志向が及ぼす影響について、肯定的な見方と否定的な見方があるものの、これらを実証的に検討した研究は見当たらない。そこで本研究では、選択的友人関係志向がどのような影響を与えるのかを明らかにすることを目的とし、選択的友人関係志向が、孤独感、自己決定意識、ソーシャル・サポートに与える影響について因果関係を検討する。小林(2001)の主張が正しければ、選択的友人関係志向が高い者は、相手が何を考えているのかわからず不安が強いので、孤独感が高く、ソーシャル・サポートも感じにくいと予測される。また、他者の限られた側面のみに接し、自分を相対的に評

価することができないことから、何かを決める際も自分自身の決定が正しいか判断できないので、自己決定を望まない傾向にあると予測される。

方法

調査参加者と調査時期

関東の7つの大学の学生を対象に、同一の質問紙を用いた調査を2度行い、両調査に参加した137名(男性63名、女性74名、平均年齢19.5歳)を分析対象とした。質問紙は授業内に配布しその場で回収した。第1回調査(T1)は2002年7月、第2回調査(T2)は2002年10月に実施した。

質問紙の構成

性別や年齢、大学名、居住形態を尋ねた他に、以下の内容などから構成された。

1. **友人関係志向**: 選択的友人関係志向に関する11項目(例: 何をやるのかによって友人を選ぶ)と、逆転項目として全面的友人関係志向に関する8項目(例: どんな隠し事もしないのが友人である)から成る友人関係志向尺度を作成した。回答は6件法であった。GP分析を行い不適切な項目を削除した17項目を最終的な友人関係志向尺度とし合計点を算出した($\alpha = .70(T1), .72(T2)$)。再テスト信頼性は、 $r = .74$ であった。

2. **孤独感**: Russellら(1980)を基に作成された改定版UCLA孤独感尺度日本語版(諸井, 1991)の20項目を用いた($\alpha = .92(T1), .90(T2)$)。回答は6件法であり、合計点を算出した。

3. **ソーシャル・サポート**: 「普段から自分を取り巻く重要な他者に愛され大切にされており、もし何か問題が起こっても援助してもらえるという期待の強さ」を測定する学生用ソーシャル・サポート尺度(久田・千田・簗口, 1989)の15項目を用いた($\alpha = .94(T1), .96(T2)$)。回答は6件法であり、合計点を算出した。ただし、複数のサポート源の中で「友人・知人」に対する評価のみを行った。

4. 自己決定意識：自己決定志向性(例：自分のことは自分で決めたいと思う)・他者決定選好の少なさ(例：大事なことは誰かに決めてもらいたい(逆転項目：以下Rと略記))・自己決定の不安の少なさ(例：何かを自分1人で決めるときには不安になる(R))・自己決定のマイナス感情の少なさ(例：何かを自分で決めるのは面倒なので好きではない(R))・自己決定の効力感(例：自分で決めても、どうせ誰かに反対されると思う(R))の5つの下位尺度から構成される自己決定意識尺度(新井・佐藤, 2000)の25項目を用いた($\alpha = .89(T1), .90(T2)$)。回答は6件法であり、合計点と下位尺度ごとの合計点を算出した。

結果

選択的友人関係志向が孤独感に与える影響

性別、年齢、大学名、居住形態、T1の孤独感・選択的友人関係志向を独立変数とし、T2の孤独感を従属変数とする重回帰分析を行い、選択的友人関係志向が孤独感に与える影響について因果関係を検討した。分析によって示された標準偏回帰係数を検討したところ、選択的友人関係志向が孤独感に与える有意な効果は見られなかった($\beta = .07, n.s.$)。

選択的友人関係志向がソーシャル・サポートに与える影響

各属性、T1のソーシャル・サポート合計点・選択的友人関係志向を独立変数とし、T2のソーシャル・サポート合計点を従属変数とする重回帰分析を行い、選択的友人関係志向がソーシャル・サポートに与える影響について因果関係を検討した。その結果、選択的友人関係志向がソーシャル・サポートに及ぼす有意な負の効果が得られ($\beta = -.15, p < .05$)、選択的友人関係志向が高いとソーシャル・サポートを低めることが示された。

選択的友人関係志向が自己決定意識に与える影響

各属性、T1の自己決定意識合計点・選択的友人関係志向を独立変数とし、T2の自己決定意識合計点を従属変数とする重回帰分析を行い、選択的友人関係志向が自己決定意識に与える影響について因果関係を検討した。その結果、選択的友人関係志向が自己決定意識に及ぼす有意な負の効果が得られ($\beta = -.13, p < .05$)、選択的友人関係志向が高いと自己決定意識を低めることが示された。下位尺度ごとに同様の分析を行ったところ、選択的友人関係志向が、他者決

定選好の少なさ($\beta = -.16, p < .05$)、自己決定のマイナス感情の少なさ($\beta = -.14, p < .05$)、自己決定の効力感($\beta = -.21, p < .01$)にそれぞれ有意な負の効果が得られ、選択的友人関係志向が他者決定選好や自己決定のマイナス感情を高め、自己決定の効力感を低めることが示された。

考察

選択的友人関係志向は孤独感に有意な効果を及ぼさない一方で、ソーシャル・サポートに有意な負の効果を持つことが示された。選択的友人関係は趣味などにに基づき各状況で各友人と深く結びついており趣味ごとに友人を切り替えているので孤独感には影響を与えないものと考えられる。しかし、その結びつきは趣味などある目的におけるものであるもので、その趣味などとは無関係な個人的な悩みなどの問題については相手からの助けを受けられないと感じている可能性が考えられる。

選択的友人関係志向が高いと、自己決定意識が低まるという因果関係が示された。また、選択的友人関係志向は、自己決定意識のうち、自己決定志向性には影響を与えないものの、自己決定のマイナス感情を高め、自己決定の効力感を低めたことから、自分で決めたいと望むものの自分の決定を肯定的に評価することができず、その結果他者決定選好を高めたと考えられる。今後の研究では、選択的友人関係が、自己決定のみならず、自己肯定感や自尊心といった自己全体に対する評価にどのように影響するか検討する必要があるだろう。

引用文献

- 新井邦二郎・佐藤純 2000 児童・生徒の自己決定意識尺度の作成 筑波大学心理学研究, 22, 151-160.
- 久田満・千田茂博・簗口雅博 1989 学生用ソーシャル・サポート尺度作成の試み(1) 日本社会心理学会第30回大会発表論文集 143-144.
- 小林 正幸 2001 なぜ、メールは人を感情的にするのか—Eメールの心理学—ダイヤモンド社
- 松田 美佐 2000 若者の友人関係と携帯電話利用—関係希薄化論から選択的関係論へ— 社会情報学研究, 4, 111-122.
- 諸井克英 1991 改訂 UCLA 孤独感尺度の次元性の検討 人文論集 静岡大学文学部社会学科・人文学科研究報告, 42, 23-51.
- Russel, D., Peplau, L.A., & Cutrona, C.E. 1980 The Revised UCLA Loneliness Scale: Concurrent and Discriminant Validity Evidence. *Journal of Personality and Social Psychology*, 39(3), 472-480.
- 辻 大介 1999 若者のコミュニケーションの変容と新しいメディア 橋本良明・船津衛・広井脩(編) シリーズ情報環境と社会心理 3 子ども・青少年とコミュニケーション 北樹出版

謝辞

お茶の水女子大学大西麻衣さんには多大なご協力を頂きました。ここに御礼申し上げます。